

# 「いのち、人権、創造」をうみだす社会福祉学の構築をめざして

いのちの重み —薬害を通して考える—

## Establishment of a social welfare science system to promote “ life, human rights and creativity ”

Dignity of Life : in the case of suffering resulting from drug-induced problems

片平 冽彦

Kiyohiko KATAHIRA

**要 旨：**この30年間の筆者の薬害問題への取り組みの中で感じた人間ひとりひとりの「いのち」の重みについて考察し、人間の幸せをはかる為の学問である社会福祉学の飛躍的發展を祈念し、その為の若干の提案を行った。

### 1. 謝 辞

若葉薫るこの季節は行事の立て混んでいる時期ですが、この場にお集まりいただきありがとうございます。この記念すべきシンポジウムのトップバッターとして、お話す機会を与えていただいたことに感謝します。私が本学に赴任して1か月余り経ちました。講義は7コマ受け持っていますが、こんなに大勢の方を前にお話するのは初めてで、若干緊張しています。

### 2. 意味深長なシンポジウム標題

本シンポジウムの標題は上記のようになっています。意地悪く言えば、「社会福祉学」が、「人権・創造」を生み出すことはあっても、「いのち」を生み出すことは、直接的にはありません。「いのち」は、まさにこの会場にお集まりの若い皆さんが生み出すものです。でも、人間の幸せをはかる学問である「社会福祉学」(定義の議論は後ほどします)が、その実践の力によって、危機に陥った「いのち」を救うことはあるし、その結果、新しい「いのち」をうみ出すこともあるかもしれない、

そのように考えると、この標題は、まことに意味深長な標題といえましょう。

### 3. 「いのちの重み」とは

はじめに、「いのちの重み」ということで思いつく言葉を3つほど紹介します。

#### (1) 「一人の生命は全地球よりも重い」(最高裁の1948年判決文に記載。正木亮「死刑・消えゆく最後の野蛮」日本評論社、1964.参照)。

この言葉は、1946年、敗戦後の貧窮の中で生じた殺人事件に対して、1948年に最高裁が下した判決の中に記された言葉です。「吹けば飛ぶような……」は村田英雄さんの言う将棋の駒ですが、「強風が吹けば飛ぶような重さの人間に宿っている『生命』を、『全地球よりも重い』と表現したのが、読む人の心をとらえ、語り継がれているのだと思います。この言葉の出典を知ったのは、正木弁護士がこの著作からです。「死刑・消えゆく最後の野蛮」とありますが、死刑は日本では続けられているのはご承知の通りです。しかし、国際的には廃止国が増加しており、1998年の時点で完全廃止国は58か国、死刑を適用しないのが15か国となっています。1989年には、国連で死刑廃止条約が採択されました。

#### (2) 「命(ぬち) どう宝」[命こそ宝](沖縄の「琉歌」。阿波根昌鴻「命こそ宝」岩波書店、1992.)。

この言葉は、沖縄の反戦地主阿波根昌鴻(あわごん・しょうこう)さんの著書に用いられている、琉歌(琉球の歌)の一節です。「戦さゆんしまち、みるく世ややがて、嘆くなよ臣下、ぬちどう宝」=「いくさの世は終わった、平和な『弥勒世』がやがて来る、嘆くなよ、お前達、命こそ宝」……阿波根さんは、この言葉を紹介して、こう記しています。「戦前は、……死ぬのが国のため、命を惜しむものは国賊だと信じさせられていた」「戦争中、わしらはあまりにも命を粗末に考えておった、二度と戦争をおこさないためには、何よりも命を大事にすることである、戦後になって、非常に反省しました」と。明治15年に出された「軍人勅諭」では、「死は鴻毛よりも軽し」と記されています。「軍人の生命はおおとりの羽毛よりも軽い」という、こうした思想は、「命こそ宝」とはまさに対極にある思想です。こうした思想こそが、日清・日露、そして15年戦争と、日本の対外的な侵略戦争遂行の柱となったと言っても過言ではありません。

#### (3) かけがえのない生命(いのち)(片平洌彦編、副題「現代の保健・医療・福祉」=6月下旬に桐書房より刊行)。

この言葉は、時々お目にかかりますが、これを頻繁に私の教え子の目に触れさせたいと思って、まもなく出版してこの東洋大学での講義に使う教科書の標題として採用しました。その中に、「人間の生

命の尊厳」の理由についての私なりの未熟な解答として、「人間の生命を大切にし、その尊厳を認め合うことは、人間社会の根底的な公理」だと、記しました。もし、人々がこの「公理」を公理として認めなくなったら、私たちの社会はまったく成り立たなくなるのではないかと思います。実際、本当に、私たちの命は、かけがえのない、モノと違って、代替性のない存在であると思います。この頃、「クローン人間」とか言って、人間もそっくりのコピーが作れる、などと言われ始めています。「イチローも宇多田ヒカルも思いのまま産める？」と、これは今発売中の週刊誌の見出しですが、「？」がついているように、中を読んでみると、「クローンで基になった人物のコピーができるわけではない」と書いてあって、私もそう思いますし、仮にクローン技術等で「そっくりさん」「瓜2つ」の人物ができるようになったとしても、そうして作り出された「命」は、やはり「かけがえがない」ことには変わりはないと思うのです。

#### 4. 「いのちの重み」を薬害を通して考える（感じる）

##### (1) なぜ、どのように「薬害」に取り組んだか

私は、1970年以来、スモンをスタートとして、薬害エイズ、ヤコブ等の薬害問題に取り組んできました。当初は、厚生省スモン調査研究協議会という「外部」からの依頼でしたが、その推進力は患者運動でした。まず最初に行なったのは、患者（被害者）実態調査です。その後、原因薬である「胃腸薬」キノホルムに関する文献的研究を行い、企業や国の問題について解明しました。研究方法は、実験的な方法ではなく、文献的、社会調査的な方法でした。このことについて、詳しくは、朝霞で開講中の「社会調査方法論」や、学部・大学院の演習・特論等を聴講していただければと思います。

##### (2) 被害者の訴え その1—スモンの「ちよんちゃん」の場合

「ちよんちゃん」というのは、千葉県に住むスモン被害者市原千春さんのことです。彼女は、1966年、20歳でキノホルム服用のためスモンになり、しびれ、痛み、歩行障害等々のキノホルム中毒の症状、そして視覚障害から失明し、そうした苦しみの中で、一時は死を望み、そうした闘病中に心の支えとなっていた母を失ったという、いわばこの世の地獄を一身に受けたような方、その人の愛称です。この愛称は、私が市原さんと出あった1978年以来、私は知りませんでした。知ったのは、今年、つい最近です。市原さんのことは、今崎暁巳さんという作家が、「この人生に愛なくば」（労働旬報社）という題で本にしたのですが、その本はもう絶版になっています。ところが、彼女のクラスメート達が、彼女の受けた凄まじい被害と闘いのことを最近になってこの本を読んで知り、絶版になっているので、旧友、数十人が集まって、「明るいちよんちゃん」という、復刻版をつくったというのです。実は、本日は、その本の出版記念パーティで、丁度この時間帯に、一宮で行われていま

す。私も招待されたのですが、こちらのシンポジウムが優先のため、メッセージを送りました。そのメッセージの一部を、ここで紹介させていただきます。

「このメッセージを紹介していただく頃、私はシンポジウムで『いのちの重み—薬害を通して考える』と題し、薬害の被害者に思いを寄せてお話します。『ちょんちゃん』が受けた凄まじい被害のことを思うと、三田幸路ちゃんに対する『山田の晃ちゃん』のように、目に涙が浮かんできます。特に、闘いの中で笑いころげた『ちょんちゃん』が、『私、スモンになって良かった』と発言されたことを聞いた時の、胸にこみ上げてきた、あの日の思いが、いままた、鮮明に蘇ります。(実際、今、涙でパソコン画面がぼやけてしまいました!)。しかし、『明るいちよんちゃん』に見習い、涙は早く拭って、社会福祉の未来を担う若者たちに、スモンを含む薬害被害者の医療福祉の確立と薬害根絶のための渾身の努力を訴えたいと思っています。」

時間の関係で後は割愛しますが、複製版「明るいちよんちゃん」はホームページで参照できるということです。詳しくは以下のサイトをご覧ください。<http://www.asahi-e.co.jp/chon>

さて、「ちょんちゃん」の若い頃の闘っている姿と、京都の中西さんが患者である奥さんを抱きかかえて訴える場面が出てくるビデオ＝ドキュメンタリー映画「人間の権利—スモンの場合」の一場面を見て下さい。このビデオは、スモン訴訟初の判決である金沢判決が出た後、被害者団体であるスモンの会全国連絡協議会(ス全協)として、厚生省(橋本大臣)に「控訴せず、判決に従って欲しい」と要請している場面です。「ちょんちゃん」がハンカチを顔にあてて泣いている場面、京都の中西さん夫妻が訴える場面が出てきます。

### (3) 被害者の訴え その2—「薬害ヤコブ」の谷さんの場合

次に、現在訴訟が続いている「薬害ヤコブ病」の被害者、谷たか子さんについて申します。谷たか子さんは、脳の手術で使った乾燥硬膜ライオデュラが異常プリオンに汚染されていたために感染・発症したと考えられる、医原性クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)、通称「薬害ヤコブ病」の被害者です。発病以来、夫の谷三一さんをはじめ、3人の娘さんや、親戚、知人・友人が実に献身的に彼女を介護しつづけてきましたが、この1月、残念なことに亡くなられました。MBS(大阪毎日放送)が撮影したビデオをご覧ください。谷三一さんがたか子さんを入浴させている場面等が出てきます。こうした場面を通して、「いのちの重み」を感じ取っていきたいと思います。そして、大津訴訟のホームページを見ていただければと思います。(大津支える会 HP:<http://www.page.sannet.ne.jp/yasuo-t/>)

### (4) 被害者の訴え その3—薬害エイズの「尾瀬さん」の場合

薬害エイズについても、話したいことが山ほどありますが、「百聞は一見にしかず」で、ビデオを

見て下さい。このビデオは、NHK「薬害エイズ患者 最後の証言」の一場面です。

「尾瀬さん」と言うのは、ペンネームで、水芭蕉で有名な群馬県の尾瀬が好きだったため、ペンネームがそうだったとのことですが、このビデオは病床での弁護士や裁判長による質問の場面で、尾瀬さんが亡くなる3週間前に撮影された、文字通り「薬害エイズ患者 最後の証言」です。尾瀬さんの「患者は医師にとりかけがえのない先生」との指摘が出てきますが、まさにその通りだと思います。こうした尾瀬さんの「遺言」を、医療・福祉の場に生かしていきたいものです。

## (5) 薬害・副作用の経済学

このことについては、配布資料（片平冽彦「薬害・副作用の経済学」経済、2001年5月号）を参照して下さい。詳しくは述べませんが、要するに、『「生命・健康」はお金では買えない』ということをお願いいたします。

## 5. 薬害問題で社会福祉学が果たす役割

### (1) 薬害問題の今後の研究・教育課題

これについても資料を参照して下さい。

今後の課題としては、これまでの被害実態の解明と被害者支援に関わる問題、「根がある」ので、残念ながら今後も発生するであろう薬害を未然に防止する課題、そして、そうした「根」を取り除くこと、『根治手術』をするための方策を解明する課題等々、たくさんあります。薬害教育の課題も極めて重要です。特に医学・薬学教育では必須科目とすべきです。全国薬害被害者団体連絡協議会（薬被連）編「薬害が消される！教科書に載らない6つの真実」（さいろ社、2000年）を読むと、そのことがよくわかります。私は、東洋大学でももちろん取り上げますが、非常勤講師として、これまで行ってきた東京医科歯科大学・群馬大学・順天堂大学の医学部や滋賀医科大学、東京薬科大学や明治薬科大学大学院での薬害教育も続けていきたいと思っています。

### (2) 薬害問題解明で社会福祉学が果たす役割

社会福祉学が対象としている「社会福祉」とは何でしょうか？いくつかの定義的な文章を紹介してみます。

- ・「個人、集団、地域社会および諸制度と、全体社会のレベルにおける社会人としての機能や社会関係の改善を目的とした個人の福祉（personal welfare）のための社会的諸サービスと自立援助過程（enabling process）である。」（国連、1950年）
- ・「福祉をめぐる社会方策」（一番ヶ瀬康子東洋大学教授、「社会福祉入門」有斐閣、1996年）

・「安定した暮らしを社会的に保障すること」(高島進日本福祉大教授、図説「日本の社会保障」法律文化社、1996年)

・「人のしあわせを社会的なしくみで実現すること」(元厚生省大臣官房審議官、現流通科学大学教授、館山不二夫編著「介護・福祉がわかる事典」日本実業出版社、2000年)

これらの「定義」のうち、最も簡潔なのが一番ヶ瀬康子先生の定義ですが、これだと、更に「福祉」の定義が必要です。この点については、一番ヶ瀬先生は、「単なる主観的な心情としてとらえるのではなく、主体的に人間らしく幸福に生きる権利(日本国憲法第13条)の基盤、機会、条件であり、日常の暮らしの中での必要への努力」と規定されています。このような動的な把握が必要でしょう。私はこれまで医学・薬学分野に身を置いてきましたが、この分野の人々の主要な関心は、「いかに病気をなおすか」ということです。確かに、病気を治すことができれば、病気に伴う諸問題は解決しますが、医薬品の中毒やH I Vのような「頭の良い」というか、巧妙な感染病原体による病気の治療は容易ではありません。ですから、治療法の研究と並行して、「病気を有して苦しんでいる人」をどう支援するかという課題への取り組みが必要で、そこに「社会福祉学」の課題が存在します。

そしてまた、なぜ、病気や被害が起きたのか? どう防ぐか? ということが、問題の根本的な解決策として必要です。ところが、医学薬学分野では、自然科学的発想が強いので、社会的な要因による被害の場合には、十分に解明できない。そうした社会的要因の解明と、それに基づく根本的な解決策の解明・提示も、「社会福祉学」の課題といえましょう。

### (3) 本学での教育構想

私は、今後の講義は、本日少しご紹介した薬害問題を中心に、難病、その他保健・医療・福祉問題について、できるだけ学生・院生の主体性を尊重して、進めていきたいと思っています。

4月以降、従来よりはいささか忙しくて、2号館のエレベーターの待ち時間の長さには少々いらいらする時がありますが、ハイキング同好会の顧問になり、自己紹介に記したように、「年寄りの冷や水」で、水泳もこの年で始めたので、身体を鍛えていきたいと思っています。

## 6. 社会福祉学の飛躍的發展のために

### (1) 基本姿勢

基本姿勢としては、1年生には入学時申し上げた「人間にやさしく、学問に厳しく」という言葉を、自分自身肝に銘じていきたいと思っています。

### (2) 北欧からの学びと実践を

財政学の神野直彦東大教授が、2000年1月10日の朝日新聞「論壇」にて、「競争社会から協力社会へ」という題で論陣を張っています。この内容は、今後の日本の政治・経済・社会・福祉・教育等

を考える上で、大変示唆に富んでいると思います。すなわち、神野教授は、かつて「絶望的な財政赤字に苦しんだ」スウェーデンが、財政も国民経済も再建した秘密は、人間のきづなを重視する「協力社会」を目指したことにあり、財源は「教育・研究開発・情報技術インフラ・福祉に重点配分されている」ことを紹介し、日本も「競争社会」に別れを告げて、そうした「協力社会」への道を歩み始めるべきと提唱しているのです。つまり、「大不況」に向かって突き進む経済を立て直す上で、教育・福祉が重要と書かれています。もしそうなら、この東洋大学での福祉教育は、日本の今後のため大変重要、ということになります。こうした点についても、皆さんと大いに議論を重ねたいと思います。

### (3) 「医療学」の研究・教育の発展を

『医学』は医師・看護婦等医療従事者に必須ですが、そうした医学に基づき社会的に実践される『医療』について研究・教育を進めていくことも重要で、そうしたことは、医学関係学部だけでなく、福祉関係学部での課題でもあると思います。例えば、河野友信編の「医療学」（朝倉書店、1990年）に盛られている内容は、福祉分野の研究・教育課題でもあると思うのは、私一人でしょうか？

そうした医療分野の研究・教育課題についても、「これはお医者さんの課題」などと限定せずに、貪欲に自分の研究・教育課題にしていっても良いと思います。

## 7. むすび

以上、未熟なお話をさせていただきました。今話題になっている「二人で紡いだ物語」（出窓社、2000年）で米沢富美子さん（女性初の日本物理学会会長になった方）が強調しているように、「勉強は本来面白いもの」だと私も思います。皆さん、これから一緒に、大切な社会福祉学を勉強していきましょう。

（本稿は、2001年5月12日に開催された「東洋大学社会学部第2部社会福祉学科開設記念シンポジウム」において行った講演の内容をまとめたものです。）

Abstract

**Establishment of a social welfare science system  
to promote “ life, human rights and creativity ”**

**Dignity of Life : in the case of suffering resulting from drug-induced problems**

Kiyohiko KATAHIRA

I was a participant in a discussion on the dignity of each individual human life, a subject which I am very interested in based on my studies on drug-induced sufferings over the past 30 years. I expressed my expectation for the rapid progress of social welfare science, which is considered to be a science for the promotion of human happiness and made some suggestions for the future.